

ジャガイモと映画 (36)

<栽培 (3)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

120. 愛を積むひと

2015年、邦画。監督：朝原雄三。

エドワード・ムーニー・Jr.の小説『石を積む人』を基にしたヒューマンドラマである。東京の下町で営んでいた工場をたたみ、豊かな老後を求めて北海道に移住してきた小林篤史（佐藤浩市）と小林良子（樋口可南子）が主人公の夫婦。しかし、ガーデンニングや内装アレンジなど充実した毎日を楽しむ良子に対し、仕事一筋だった篤史は暇を持て余すばかり。そんな夫を見かねた良子は、篤史に家の周りの石堀づくりを頼む。ところが、良子の持病である心臓病が悪化し、篤史の願いもむなしく亡くなってしまう。

妻の死に絶望し、心を閉ざした篤史だったが、彼女が死の直前につづった自分宛の手紙を読んだことをきっかけに、妻が途中まで完成していた石堀を完成させようと、懸命に石を積んでいく。この愛は周りの人々やそれまで疎遠であった娘へと波及し、血縁の有無関わらず様々な愛が積みまれていくことになる。

温かな物語を描くには、それに見合う大自然と美しい四季の移ろいが役立つ。畑の起伏で知られる美瑛や背景の十勝岳をマルチコプターを駆使して4kカメラで空撮したものに加え、1978年マイルドセブンの

CMに使われた丘からのジャガイモ畑も背景に出てくる。ポテトの丘と呼ばれる丘陵地帯にある約5ヘクタールの町有地には、木造2階建ての家と石堀のセットが建設され、パンが美味しい『フェルム ラ・テール 美瑛』の前に現存している。

メガホンを取るのは『釣りバカ日誌』シリーズなどの朝原雄三。主人公の脇で『悪夢ちゃん』シリーズなどの北川景子が控えめに演じ、柄本明がお笑いキャラになり、『日々ロック』などの野村周平も出てくる。

2017年9月16日、この映画『愛を積むひと』のロケ・セットを見ることができた。美瑛町北西の丘展望台の近くで食事処を探して偶然行ってしまった。『フェルム・ラ・テール 美瑛』訳せば『ファーム・大地 美瑛』で美味しいパンと柔い牛肉を食べたあとに、起伏のある丘をカメラに収めようと前に進むと赤い屋根の周りを石堀で囲わ



写真1 美瑛町ポテトの丘のセット

れた家が現れた。石堀は劇中でも同じ名前で登場した平間造園が手掛けたものかどうか。積まれた石の中にあるハートの石を探す人もいた。

<参考>エドワード・ムーニー・Jr 著、杉田七重訳「石を積む人」.2014. 小学館文庫。

121. 素晴らしい哉人生（恋と馬鈴薯） （原題：Isn't Life Wonderful）

1924年、アメリカ映画。監督：デヴィッド・ウオーク・グリフィス。

監督がフランク・キャプラで、ジェームズ・スチュアートの出る類似名（原題：It's A Wonderful Life）のものとは別の無声映画である。

Geoffrey Mossの文学作品に基づいている。監督（1875-1948）は脚本・俳優もやり、様々な映画技術を確立して、映画を芸術的な域へと高めた人である。

第一次対戦のころ、ドイツに来た若いポーランド人インガ（キャロル・デンプスター）とポール（ニール・ハミルトン）がいた。厳しいインフレと住宅難により結婚できない。そこで空地を借りてジャガイモを植え、その収穫で小さな家を建てようと

する。やがて収穫の時期となり、ジャガイモをリヤカーに運んで林の中を引いて売りに出かけると暴漢に襲われてすっかり盗まれてしまう。ポールは絶望するが、インガは彼を励まして再起させ、その将来にかける、というストーリーであった。

ジャガイモ以外の注目は、観賞中の観客に拍手を求めたことである。パリで上映したときは、観客から熱烈な拍手をもらうことに成功した。この演出手法は1947（昭和22）年、黒澤 明監督の、『素晴らしき日曜日』に取り入れられた。すなわち、終戦から2年目の冬の日曜日。傷跡が残る東京。雄造（沼崎勲）と昌子（中北千枝子）の二人はデートをするが、手持金はごく僅かであり、住宅展示場を見学するも高嶺の花である。子供の野球に飛び入りすると、雄造の打ったボールが饅頭屋に飛び込み、損害賠償を払わされる。次に戦友が経営するキャバレーを訪ねるが、物乞いと勘違いされる始末。その後も災難が続き、雄造のアパートに立ち寄ることになる。そこで彼女の体を求めるのだが、怖れた昌子は部屋を飛び出す。やがて観念したように戻ってきて、泣きながらレインコートを脱ぎはじめ。心を打たれた雄造は「ばかだな、いいんだよ」と昌子をいたわり詫げる。

雨がやみ、再び街に出た2人は喫茶店を開く夢を語り合う。そして日比谷野外音楽堂に足を運び、雄造はオーケストラの指揮の真似をして昌子に『未完成交響楽』を聞かせようとする。しかし、いくらタクトを振っても曲は聞こえない。すると昌子はステージに駆け上がり、客席に向かって叫ぶ。「皆さん、お願いします！ どうか拍手をしてやって下さい！」この言葉に励まされた雄



写真2 素晴らしい哉人生の広告

造が再びタクトを振ると、『未完成交響楽』が高らかに鳴り響くのだった。

東宝争議の影響でスター級の俳優が払底した中、黒澤明監督が新人俳優の沼崎勲らを集めて、心温まる作品をつくってくれた。蛇足であるが、黒澤家ではコロッケと言えば定番のひき肉とジャガイモであり、ステーキでは脂の多いサーロインを好んだと言う。

122. アレクセイと泉

2014年。監督：本橋成一。

監督は1940年東京都中野区生まれ、炭鉱や魚河岸、上野駅、サーカス、屠場など市井の人々をテーマにした作品を数多く残している。1986年に起こったチェルノブイリ（旧ソ連・現ウクライナ共和国）原発事故の被災地で暮らすナージャラの住む『ナー

ジャの村』を初監督し、ベルリン映画祭を始め、世界各国で好評を博した。その後数本の映画を撮ったが、ここでは、音楽家・坂本龍一と組んで、チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシ共和国東南部にある小さな村ブジシチェを舞台にし、〈泉〉を主題としたドキュメンタリーである。

この村の美しい森は、チェルノブイリと同じくらい汚染されており、60ないし150キュリーの放射能が、検出され、強制移住を指定された地域であった。しかし、ここでしか暮らせないと55人の老人と1人の青年アレクセイが戻ってきて、小さな泉を中心にほぼ自給自足で暮らしている。この村の学校跡からも、皆で掘るジャガイモ畑からも、森からも、採集されるキノコからも放射能が検出されるが、不思議なことに、この〈泉〉からは検出されない。

「なぜって？それは百年前の水が湧いているからさ」、「あの泉のそばには、神様が立っている」と、村人たちは自慢そうに答える。季節ごとのお祭りはこの泉で行われ、水を汲んだり洗ったりするだけの場所ではなく、村人の心のよりどころになっている。ウクライナと言え、ジャガイモの生産量はドイツよりかなり多く、アメリカと肩を並べているところである。映画では、ジャガイモ好きの貴方に、ジャガイモ植えや収穫シーンも見せてくれる。

附. キュリーは放射能の古い単位。1キュリーは370億ベクレル。



写真3 ベラルーシのブジシチェ